

福井史料ネットワーク

創設事情 2004年7月18日 福井県足羽川流域水害契機

福井県立博物館澤学芸員が神戸大学出身ということがあり、神戸資料ネットの支援を受けて創立。

7月21日 福井県内の報道機関に対して「福井豪雨被災地における古文書等資料の救出のお願い」

活動 福井県史、自治体史目録などから被災地における史料所蔵者リストを作成し、リストに基づき、手分けして所在調査

反省点1 戸別訪問調査の折に、今立町の和紙製造業者の蔵の床下浸水を確認したが、「大丈夫です」、という住人の返答を信用して、確認しなかった。その後、床下からの湿気によって、保存文書が壊滅したことが判った。今立和紙の歴史に取って最も重要な文書を失ってしまった

反省点2, 幸いにも被災した資料が多くなかったが、そのことが市民・寿民からの参加がないままに活動が終息したことがある

福井水害後の活動

『歴史評論』666合005年10月に福井史料ネットの体験を寄稿するなど、経験を伝える活動。

福井県文書館における被災資料の取扱講座開催。

敦賀短期大学における水損史料の救済実習開催。

被災地に対する神戸資料ネットを通じての寄附金。

活動の停滞とその背景

- * 事務局体制が不十分だった。福井大学教育学部教授を代表者とし、事務局を同研究室においたが、院生や学生の動員が継続的にできず、事務局体制の維持が不十分であった。
- * ボランティア組織であるから、常時活動はしなくても有事に集まればよい、という考え方が支配的だった。
- * 市民や住民を巻き込んだ形が展開できなかった。

活動の現状とこれからの課題

<現状>:

- 第一回全国史料ネット集会後、代表実質不在となる期間があったり、活動は寄付活動にとどまっている。
- 2020年になって福井大学教育学部長谷川裕子教授が代表に就任した。しかし、代表を支える事務局体制が整備できていないので、名ばかりの存在となってしまっている。これを克服する意識はメンバーに共通している。

<課題と克服へ一核となる大学を失った衰退する地域における地域歴史遺産保全への取り組み一>

- 敦賀短期大学が、2013年に閉学されたために、福井県嶺南地方の活動拠点を失ったが、美浜町菅浜の旧小学校に、若狭路文化研究会を継承して2016年に「若狭路文化研究所」を創設し、地域の歴史民俗資料の調査研究と保全の活動をおこなっている。2020年度からは前身の研究会を完全に継承して市民講座を開設し、関心のある市民の掘り起こしを図っている。2021年度からは、当該地域自治体博物館、資料館学芸員等を対象とした講座を開設して連携を強化して行く。しかしなお、史料ネットの機能を負担するまでの力はない。これからの活動を通じて福井史料ネットを補助する役割を果たせるようにしたい。

福井史料ネットワーク副代表 多仁照 廣(若狭路文化研究所々長)

